

学徒動員と鹿沼の空襲

鹿沼市・女性

●戦争中の学校生活

昭和16年4月に鹿沼女学校に入学しました。粟野の家から自転車で、砂利道を12歳、片道50分かけて、もう一人の上級生と一緒に通っていました。バスが通ると一面に埃が立って、セーラー服の襟のひだに白く埃がたまったものでした。

その年の12月に戦争が始まりました。次の年は教頭先生が先に立って学校全体で畑仕事をしましたが、1年の半分くらいは勉強もしました。英語のアルファベットくらいは習いました。その後、学校から集団でトラックに乗せられて、各方面へ農家のお手伝いに行きました。粟野方面、北押原方面、板荷方面：それぞれに先生が配置されて、毎日農家の稲刈りや田植えなどの手伝いばかりになり、勉強どころではなくなりました。

私は南摩、粟野、清洲、その辺の農家のお手伝いを1年くらいやりましたが、いちばん初めは富士山（ふじやま）の後ろの愛宕山（あたごやま）での開墾作業でした。肥料を学校から運んで、さつまいもなどを作りました。富士山の山頂に火葬場があって、農場に行く度に、ああ今日も煙が出ている…と、見ながら登っていつ



(上) 農村に出発



(下) 愛山での作業

鹿沼高等学校四十年誌」より

たことも、懐かしいです。終戦になって私たちが畑をやめたあと、ある方が譲り受けて桃の木を植えたようです。結婚して3年目に、ここに偶然越してきた時に、二番目の女の子をおんぶして下駄履きで自分たちの起こした山へ桃を買いに行きましたよ。その後、桃の木の寿命が来て、それっきりになって、今では荒れ放題です。

20年の4月が卒業ですが、そのときに学校で専攻科というのを設けました。卒業後、友達は役場に勤めたりしたのですが、家に帰ると「挺身隊」に取られてしまうから、家には帰らずに専攻科に入りました。

●学徒動員で帝國製麻の寮に

戦争が激しくなっていたので勉強どころではなくなり、学徒動員で府中町の帝國製麻（現テイセン）に行くことになりました。

私は自宅が遠くて通えないので、19年4月に寮に入りました。部屋は割当てられ、一部屋に4〜6人くらいいたでしょうか：そこへ熟練工の女工さんがお姉さんとして来た。

当時の女工さんのことですが、その頃は小学校6年までが義務教育でしたから、小学校を卒業してから働くために、東北から連れてこられた少女がたくさんいました。みんな、おっぱい頭であどけない顔でした。そんな少女たちと一緒に寮に入っていました。

東北から来た少女たちはみな、麻を布に仕上げるまでの過程のなかのいちばん厳しい作業場でした。糸をつむぐ前の状態で、糸を蒸かすため常に湯気にあたっていました。いつも床が濡れているので、高歯の下駄を履いて仕事をしていました。成績のいい子は事務の仕事をしたようです。今ではもう亡くなった方が多いですが、その後、ずいぶん鹿沼に嫁いでいます。

学徒動員の仲間には、その人の適性を見て先生が職場の担当を決めたので、それぞれ違う持ち場でした。私は麻を織る機場（はたば）にまわされ、数か月後には工具さんと同じだけ織れるようになりました。機械を2台持たされたんです。モーターが動く、大きな杼（ひ）が入って

横糸が動く。50 兎が 1 反なのですが、それを織る仕事でした。そこで優良可の成績の「秀」をもらった思い出もあります。

その織った布は、何になるんだろうと思っていたら、大砲の覆いやトラックの幌(ほろ)とかになったらしいです。早く織れ、早く織れって急かされました。巻き取った布の厚みを測ると、50 兎の長さがわかるんです。眼鏡をかけた主任さんが物差しを持って歩きまわって、それで追いかけられるように仕事しました。

熟練工になると、真っ白い薄い布を織っていました。海軍の軍人さんの洋服になると聞ききました。真っ白で美しく、見事な布でした。

●工場での重労働

工場の待遇が悪いと言って、私たち生徒は、ストライキを起こしたことがありました。危なく、「みんな退学だ」と怒られました。女工さんと同じ扱いが不満だったのだと思う。学徒の人は勉強もさせてくれるというはずだったので、自由時間なんてなかったし、食べ物も不満でした。最後の頃は空襲警報が鳴っていても、仕事しろって、防空壕にも入れてくれなかった。水神さんのところに防空壕がありました。空襲警報が鳴っても、一度も入ったことなかったんですよ。

当時はサツマイモにご飯つぶが付いているような食事だったけど、軍需工場だったから、

天ぶらなんか食べられるようなことがあったけど、さすがにご飯は少なかった。15 歳くらいで 8 時間働いた。二交代制で、機場には休憩時間はなく、糸と糸を結ぶときが、あえて言えば休憩だった。よくやりましたね：一日中麻布の埃をかぶって頭から真っ白。あそこで働いていた私が、こうして生きていられるんだから、本当に頑丈に生まれてきたんですね。体の具合を悪くして卒業してから亡くなった方がたくさんいます。

●空襲の夜

昭和 20 年 7 月 12 日、その夜、鹿沼に空襲がありました。防空壕にいったん逃げ込んだけれど、それではとても助からないだろうと、外へ逃げるよう、舎監の人が寮外に出してくれたんです。そして、予め、「万一のことがあったら鹿沼高校めがけて逃げてくるように」と学校の指示があったのですが、そのときはもうパニックで、恐怖の気持ちがいっぱいで、学校に逃げるなどなど思い出せませんでした。とにかく自分が逃げようとするだけで精一杯でした。

一番西の方に門があったんです。川の近くじやなくって西にあったからすぐ逃げ出せたんじゃないでしょうか。非常袋を肩にかけるのもやっとな、靴を下駄箱からだすのもやっとなとした。2 階建ての寮でしたが、2000 人以上いたかもしれない。みんなが逃げ出してくるんだ



黒川をはさんで東西に帝国製麻の工場を臨む昭和 30 年頃の航空写真 (写真提供：鹿沼商工会議所)

から大変。私たちは、現在の福田屋の東側の黒川の堤防沿いに上殿まで逃げていきました。8 人が一緒でした。

東京からも学徒動員でずいぶん女学生が来てましたが、そういう人と仲良くなって喋るなんていうことなんてなかったけど、逃げる時後ろから痛いよ、痛いよって言っている子がいました。焼夷弾の火が足にかかったのかも知れない。東京から来ていた女学生でした。その後どうなったのかはわかりません。

振り返り、振り返り、逃げていきました。府中橋のその向こうにテイセンの橋が今でも残ってますが(二〇一五年 9 月の豪雨で流出した)、その上の方の高いところから、細い火がちらち

ら、ちらちら、落ちてきて、壮観でした。まるで花火を見ているようでした。防空壕から「早く逃げろ」と舎監の先生に言われて、首を出した時には、周りに、油脂焼夷弾というそうですが、火が灯った大きなロウソクのような焼夷弾が空いっぱい落ちてくる。それを避けながら



かつての帝国製麻の寮
絵：斎藤致（鹿沼市） 昭和47年頃か？



鹿沼の空襲の記憶 絵：斎藤致（鹿沼市）
仲町から上材木町、戸張町方面を見ている。北の空が赤く燃え上がっていた。

逃げました。

雨がしとしと降っていました。竹藪の中に入っただけで、空襲も収まったよなので、今来た道を戻りました。

ところがなんと、何十棟も建っていた寮がかなり燃えて、きれいになくなっていった……お花など女工さんに教えていた立派な講堂もあつたんですが。

工場の塀を越えて、鹿沼の省線駅（現JR鹿沼駅）から故郷に逃げた人もいれば、逃げられなかった人もいたようでした。防空壕に入っても、完全な防空壕じゃなかったから、上からドカンと落ちてつぶれて圧死しちゃった人もいました。

空襲にあつたのは、明かりが漏れたからだという話もありますが、軍需工場というので、事前にチェックされていたのでしようね。工場が燃えないで寮だけが燃えてしまいました。現在のピバホームなどショッピングモールの、あの辺全部そうでした。東京の高校、工業高校の生徒がたくさん来ていたので、男子寮も少しありました。機械を直したりする人たちです。その寮も燃えてしまいました。

●宇都宮も変わり果てた

学校の指示があるまで家で待機していたのですが、そのとき、誰かと宇都宮へ行ったこと

があります。どうやって行ったのかは記憶がないのですが。二荒山神社から見渡すと、空襲で宇都宮の町が消えて跡形もなかった。

家に帰ってくる途中、おばさんたちにわーっと囲まれて聞かれた。「省線駅、アメリカ軍が付いたんだって？」そんな噂が流れていました。

●その後

戦争が終わって、学校の校長先生は戦争に協力したからということで、CHO（連合国軍最高司令官総司令部）に40歳台にして学校を辞めさせられてしまった。

例幣使街道あたりでは、東照宮がアメリカに持って行かれるんじゃないかと噂になりました。道でジープに出会ったときは、女たちは連れて行かれちゃう、という噂だったから、頭を坊主にして、男のふりをする女性もいた。日本が戦争に負けて占領されたわけだから、怖かったのです。

〈二〇一四年10月、お話を伺ってまとめました〉